『まんじ』149 号(2018.08)

李朝史を引継ぐ金正恩の世襲過程

新井　宏

まえがき

最近、日本でもしばしば紹介されているが、韓国の歴代大統領は退任後、亡命、暗殺、死刑、無期懲役、自殺、収賄罪、職権乱用罪など、例外なく悲惨な処遇を受けている。いくら「大統領の犯罪」に対する正当な処罰と強弁しても、「政治的な報復」であることは誰でも判る。

実は十五年ほど前、韓国の大学にいた頃、『まんじ』九十五号に、韓国大統領の悲劇の連鎖が、李氏朝鮮王朝（李朝）五百年間に繰り広げられた四十数件の政争・報復の連鎖に、あまりにも良く似ていることについて「政争の国」と題して紹介したことがある。

いわば李朝は、儒学者たちの政治勢力の士林派、時代により変遷があり簡単には要約できないが、西人派（老論派、少論派、僻派）、東人派、南人派（時派）、北人派（大北派、小北派）などと称する党派による政争に明け暮れていた。

国王が代われば、国王擁立に貢献した党派が政権を握り、旧派は徹底的に粛清される。そればかりでなく、国王も自己の権力を保持する目的で、しばしば意図的な政権党派の交代「換局」を行った。そのため、政争は常に止むことなく、悲惨な報復劇が繰返されることになったのである。

このような数多くの「政変」の中には党派や人物の固有名詞だけを入れ替えれば、そのまま次に通用するほどよく似ている例が多い。

もちろん日本にも政争は有ったが、同時代の江戸期を通して、李朝のような悲惨な類例を見いだすのは困難な

のである。

そんなことを「政争の国」と題して書いた時に、ついでに、その後の大統領の運命についても同じ経過をたどるだろうと予測した。

それから十五年、あにはからんや、その時の大統領、盧武鉉は自殺に追い込まれ、続く保守系の大統領、李明博や朴槿恵は、盧武鉉自殺事件の報復として、収賄・職権乱用罪等で長期懲役の重刑を受ける趨勢にある。別表に歴代大統領の退任後の運命について整理して示す。

韓国の歴代大統領の受難史

第1～3代	李承晩(1948～60)	4・19革命で米国に亡命
第4代	尹潽善(1960～62)	時局に関する事件で司法処分3回
第5～9代	朴正熙(1963～79)	金載圭・中央情報部長により殺害される
第10代	崔圭夏(1979～80)	実権なし
第11・12代	全斗煥(1980～88)	軍事反乱などの罪で死刑宣告
第13代	盧泰愚(1988～93)	軍事反乱などの罪で無期刑宣告
第14代	金泳三(1993～98)	息子の賢哲か韓宝不正事件で懲役
第15代	金大中(98～2003)	息子3名他親族が斡旋収賄罪
第16代	盧武鉉(2003～08)	収賄容疑で検察が捜査中に自殺
第17代	李明博(2008～13)	収賄や横領、職権乱用の罪で起訴中
第18代	朴槿恵(2013～17)	職権乱用なとで懲役24年、罰金18億円
第19代	文在寅(2017～　)	?

そうなると現大統領文在寅の今後を予測することも難しい事ではないだろう。現に、朴槿恵が懲役二十四年・罰金十八億円の宣告を受けた時に、旧執権党（現自由韓国党）の洪準杓代表が、文在寅に向かって「裁判で最もぞっとした人はいま官邸にいる大統領だろう」と述べ、報復ブーメランを警告している。

マスコミも、「大統領の在職中、検察は忠犬として絶対的権力を行使し奉仕するが、大統領が退任すると、新しい大統領のために前大統領を食いちぎる」と韓国的な政治風土について風刺している。

まさに李朝の「士禍」の繰り返しである。沁みついた歴史というものは、新しい時代、新しい制度の下でも大して変わらないらしい。

実は、このように李氏朝鮮王朝（李朝）からの悪しき歴史を受け継いでいる例は、南の韓国の政争ばかりではない。北朝鮮における金正恩の権力継承過程にも李朝の歴史がそっくりそのまま再現されているのである。

すなわち、金正恩の世襲過程と極めて良く似た事例を李朝の歴史に探すと五件も見出だせる。しかもその内の二件は登場人物や宗主国の固有名詞さえ取り替えれば、物語が完結するほどなのである。

北朝鮮は建前上共産主義国家でありながら、三代も世襲を繰り返している独裁国家である。いわば李朝の遺伝

子を引き継いだ「中世的な王朝国家」なのである。

今回はまず、①北朝鮮の第三代金正恩の世襲経過が、②李朝第十五代光海君や、③李朝第十七代孝宗（鳳林大君）の世襲過程にそっくりであったことを示したい。

更には、光海君や鳳林大君の事例も、それ以前の④李朝第三代太宗（芳遠）や、⑤李朝第七代世祖（首陽大君）、⑥李朝第十一代中宗（晋城大君）の世襲過程の繰り返しであったことにも触れておきたい。

もちろん類例が多数あるからと言って、それが将来を規定するわけではない。しかし、南北朝鮮間の数多くの不幸な歴史に目をつむり、表面上の友好ムードを損なわないように細心の努力を重ねていても、歴史は無情であり、また不幸な類例を積み重ねることになるであろう。

北朝鮮第三代金正恩の世襲経過

二〇一〇年六月、金正日総書記は、長男の金正男と三男の金正恩を伴い中国に赴き、金正恩を後継者に決めたことを胡錦濤国家主席に報告した。中国王朝が王位継承に勅許（誥命）を得る儀式である。

その頃、中国は三男の金正恩の世襲に強く反対していた。共産主義国家で世襲が続くことなど理念上あり得ないのに加えて、中国派の長男の金正男を差し置いて、三男の金正恩が継ぐことなど、父家長制が伝統の中国王朝としては認めがたかった。

中国にとって御しやすいのは長男の金正男であった。マカオや香港に活動基盤を持ち、北朝鮮の外貨調達を担当していた正男は、中国の保護下にあり北朝鮮内にも侮れない力を持っていた。李朝の権力抗争史によれば、ここで金正恩は金正男を除去しなければならない。

その最初の試みが、二〇〇九年四月初め、北朝鮮の平壌中心街に位置する「特閣」に、北朝鮮情報機関である国家安全保衛部要員が乗りこんだ「ウアム閣襲撃事件」である。ここは金正男の平壌における根拠地で、主にマカオや香港に住む正男が帰る度に滞在し、知人たちとパーティーなどを楽しむ場所であった。

もちろん保衛部要員たちを送ったのは金正恩だった。父、金正日から後継者と指名されてはいたが、潜在的な脅威である金正男とその追従勢力を無力化させることが急務であった。

そのため韓国マスコミはこの事件を「平壌版王子の乱」と名付けた。「王子の乱」とは、李朝初代太祖の五男芳遠が王世子の芳碩（太祖の正妃の二男）等をクーデターで殺害した事件である。

同じ脈絡で見ると良く判るのが、二〇〇九年末に北朝鮮経済を崩壊直前まで追いやった貨幣改革である。これを仕組んだのが金正恩で、貨幣改革の反対者すなわちマカオにいて、国際金融に通じる金正男に反正恩派とレッ

テルを貼り、一気に壊滅させる目的によるものであった。

だから二〇一〇年三月に起きた韓国海軍哨戒艦「天安艦」の魚雷による撃沈事件も、十月に南北境界水域に近い韓国の延坪島を砲撃した事件も、正恩の権力確立のためのゲームと見なされているのである。

金正日総書記が亡くなったのは、二〇一一年十二月「視察に向かう列車の中で、心筋梗塞を起こして十七日朝に死亡した」とされている。しかし、米韓当局は衛星情報の分析で、死亡したとされる十七日当日、金正日の専用列車が動いていなかったことを確認している。また前日、金正日が金正恩からの電話に激昂し、その夜、長女宅で泡を吹いて倒れたとの情報もある。

李朝の権力抗争史、すなわち、二十六代の王あるいはその王世子候補者のうち十二名までが毒殺等異常な死に方をしていることに照らし合わすなら、金正恩による暗殺が疑われても当然である。

そして金正恩が政権を受け継いでから大粛清が始まる。

まず二〇一三年十二月、金正日の側近で、金正恩の庇護者役であった叔父の張成沢を対空機関銃で処刑した。張成沢が中国との利権を握っていたからであるが、張成沢の親族はその直系の幼子を含めて全員処刑されている。

続いて二〇一四年には会議中に居眠りをしたとの理由で玄永哲人民武力部長が処刑され、二〇一六年には同じく会議中に眼鏡を拭いたとの理由で金勇進副首相が処刑されている。このほかにも、韓国の国家安保戦略研究院によれば、金正恩が政権に就いてから、三百四十人の処刑が行われたという。

そしてその極めつけが、二〇一七年二月のマレーシアの国際空港における金正男毒殺事件である。これで、金正恩はライバルを完全に消し去った。中国が金正恩の体制を崩壊させても、受け皿が居なくなったのである。

以上のような経過を箇条書きにまとめると次のようになるであろう。

A　先代王の（金正日）は、継承序列劣位の（三男金正恩）を後継者に選んだ。しかし宗主国（中国）は、継承序列優位の（長男金正男）を支持した。

B　（中国）の意向によって地位を追われることを恐れた（金正恩）は結局（金正男）を殺害した。

C　継承権を確保した（金正恩）は（金正日）と微妙な対立関係となる。

D　（金正恩）は政権掌握するや、①反対派を大粛清（張成沢、玄永哲、金勇進ほか三百余名）し、②（中国）の意向に逆らう政策（核兵器や大陸間弾道弾の開発）を採る。

まとめた文章はぎこちないが、（　）内の金正日、金正恩、金正男、張正沢などの固有名詞を、李朝の人物に取り替えると、そのまま利用できるほど類似している。以下にそれを紹介する。

李朝第十五代光海君の場合

李朝第十五代光海君が王世子となったのは、壬辰倭乱（文禄慶長の役）の非常事態に際して、父の宣祖が北の義州まで落ちのびたため、咸鏡道に避難した光海君を分朝とせざるを得なくなった一五九四年である。その直前まで、李朝では王世子冊封問題で深刻な勢力争いを繰り広げていたが、やむなく採った処置であった。

光海君には同腹の長兄臨海君がいたが、壬辰倭乱の際に、李朝へ反旗を翻した民衆によって捕らえられ、加藤清正へ捕虜として引き渡されてしまった。あるいはそのことが影響してかも知れないが、乱暴で激しやすい性格として人望がなかった。

それに対して、光海君はなかなか人望があり、壬辰倭乱の時は、直接戦場を行き来し、実質的に戦争を指揮し、義兵や民衆を励まし、戦後処理にあたっても、権威を築いて行った。それは父親の宣祖にとって、自分よりも民衆から信頼され、人気のある息子と映り、面白くない状況をもたらした。

このようにして、戦時下の非常事態とは言え、いったん王世子に決った光海君ではあったが、「義兵を集めて来い」と死地へ送り出されるなど、問題が一段落したわけではなかった。王世子に冊封するには明の朝廷に報告し「誥命」を受ける必要があったが、明は長男の臨海君がいるとの理由でこれを拒絶した。

その上、宣祖の正妃には嫡子なく、光海君も臨海君も側室の子であった。ところが継妃となった仁穆王后にその後永昌大君が生まれたため、光海君は王世子になったとは言え、その立場は不安定であった。

しかし、職責を着実に果たす光海君に対して、臣下の信頼は篤く、しかも一六〇八年宣祖が亡くなった時に、永昌大君はわずか二歳であり、王位継承の決定権を持つ母の仁穆王后さえも、現実性がないと諦めて、ここに光海君の即位が決定した。

まず王位継承に際し、宣祖の光海君への禅位教書を隠して永昌大君を擁立しようとした柳永慶を配流して殺害した。それだけでは済まなかった。宗主国の明による王位継承への干渉から粛清の嵐が吹き荒れるのである。

明では、中国王朝の意向を無視し、長男の臨海君や正妃嫡子の永昌大君を差し置いて、側室の次男が王位を継承したことに異論が起こり、ついには真相調査団を派遣するという事態にまで発展した。すでに王位は継承されていたのであるから、明の態度は朝鮮と光海君を無視したものであった。

もちろん、明の調査団派遣には背景があり、光海君の王位継承に反対していた小北派が明に要請したことは明らかであった。そのことは光海君を支持して勢力拡大を

図っていた大北派にとってはもはや猶予ができない状況であった。その上、長兄の臨海君は自分が王位を継承すべきだったと公言し、露骨に光海君を誹謗していた。

大北派の中心人物たちは、臨海君が謀反を企んでいるとして死薬を送るように光海君に迫るが、実兄のことでもあり光海君は拒絶する。しかし、大臣達が繰り返し強力に要求を続けると、結局、自身の意志を貫徹する事ができず、流配とせざるを得なかった。その後、臨海君は重臣たちの放った刺客により暗殺される。

臨海君の死は、その後に続く粛清の序幕に過ぎなかった。臨海君の他にも、大北派を脅かす存在としては、小北派が支持する嫡子の永昌大君や宣祖四男信城君の養子の綾昌君が生きていて、その除去が焦眉の急であった。

まず一六一二年には「金直哉の獄事」に絡んで小北派百余名が粛清された。続く一六一四年には「七庶の獄」に絡んで、幼い永昌大君が配流され蒸し殺しにされた。

更には一六一五年には綾昌君推戴事件が生じ、綾昌君はもちろん連座した申景禛なども除去された。そして一六一八年には永昌大君の母仁穆大妃を廃位、幽閉してしまう。これらの過程で大北派が政権を独占し、これに反対する小北派、西人派の勢力は大きく削がれた。しかしやり過ぎであった。

光海君が就任してから間もなく、東北アジアの国際情勢が急変した。後に清となる女真族の後金が一六一六年に建国され、明や朝鮮を圧迫していた。北方への備えは急務であり、壬辰倭乱からやっと立ち直りつつあった李朝にとっては深刻な負担であった。しかも壬辰倭乱への派兵によって国力が疲弊した明からは、後金との戦いに援軍の要請が相次ぎ、いわば後金と明の間で、綱渡り外交を繰りひろげざるを得なかった。

その際、李朝の伝統的な士林派勢力は、理念ばかり先走り、壬辰倭乱で助けてくれた明に報いる「大明事大主義」が大勢であった。その中で光海君が繰り広げた実利外交はむしろ後金を重視し、明に援軍を送りながら、裏では後金に付くものであった。背景には、明が光海君の王位継承に干渉したこともあったに違いない。

光海君は明の援兵要請に応え、姜弘立に一万の兵を与えて出兵させたが、明が不利になると、適当に応戦したふりをして後金に降り、抑留されながらも後金との和議交渉に臨むという巧みな両面外交を推進した。

これにより李朝は明との関係を断つこともなく、また後金から怨みを買うこともなく、後金の情報を得ることが出来た。

その後も光海君は、明と後金の双方との外交関係を維持し実利を優先する外交政策を展開した。ところがこうした光海君の外交政策を批判する士林派が勢いを得る。

現実主義者が憎まれるのは歴史の必然である。その声

は主として儒生や西人派であり、西人派は明に対する徹底した事大主義路線を固守し、仁穆大妃の流配事件を機に光海君や大北派への反撃の準備を始めていた。

これが「仁祖反正」すなわち仁祖のクーデターに繋がり光海君は失脚する。

この流れを金正恩の例にならって要約すると次のようになる。

A　先代王の（宣祖）は、継承序列劣位の（次男光海君）を後継者に選んだ。しかし宗主国（明）は、継承序列優位の（長男臨海君や嫡子永昌大君）を支持した。

B　（明）の意向によって地位を追われることを恐れた（光海君）は結局（臨海君と永昌大君）を殺害した。

C　継承権を確保した（光海君）は（宣祖）と微妙な対立関係になる。

D　（光海君）は政権掌握するや、①反対派を大粛清（柳永慶や金直哉に関連して百余名）、②（明）の意向に逆らう政策（国防強化・後金接近・中立外交）を採る。

李朝第第十七代孝宗（鳳林大君）の場合

李朝の歴史では第十代燕山君と第十五代光海君だけが廟号で呼ばれない王である。いずれも暴君として失脚したからであるが、しかし近年、光海君の評価は、壬辰倭乱により国力疲弊した中、折から勃興した後金（後の清国）と宗主国明の狭間で現実的な施策を採った王として再評価されている。

第十七代孝宗は、光海君を「仁祖反正」によって葬った十六代仁祖の次男鳳林大君である。反正の理由として掲げられたのが、先王（宣祖）の毒殺とか臨海君や永昌大君の殺害とかであるが、主因はむしろ光海君が後金寄りの政策を採っていたことにあった。

仁祖の支持層は士林派の本流、西人派や南人派で、理念的に女真人の後金（清）を見下し「親明背金」を唱えていた。その結果が一六三六年の後金（清）による侵略「丙子胡乱」を招き、仁祖は「三田渡の屈辱」を受け、清の属国に成らざるをえなかった。

その際、仁祖の長男昭顕大君と次男鳳林大君は清の人質とされたが、一六五九年に明が滅亡したことに伴い許され帰国した。

その間、長男昭顕大君は清にもたらされた西洋の文化に接し、親清的な心情になり、反清主義者と烙印を押された仁祖に替り、外交使節的な役割を持つようになっていた。しかし、次男鳳林大君は仁祖と同様に徹底した反清主義者となっていた。

このような状況は仁祖を著しく不安にさせた。長男昭

顕大君が帰国すると王位を譲らなければならないかも知れない。

その背景の中で、昭顕大君は帰国後まもなく病床に臥せ二か月後には全身が真黒くなり変死してしまう。

もちろん正式な記録にはないが、状況証拠から毒殺された可能性が極めて高い。

それは昭顕大君の死の二か月後に、仁祖は臣下の反対を押し切り、新たな王世子に次男の鳳林大君を決めたからである。継承順位から言えば、昭顕大君の十歳になる長男が継ぐべきであったが、逆に昭顕大君の周辺勢力を全員配流したばかりでなく、昭顕大君の妃や長男・次男まで配流の上殺害してしまった。

その後まもなく仁祖は亡くなり、鳳林大君が第十七代孝宗に就任する。孝宗はさっそく親清勢力を追放し、北伐計画（真の目的は反清）を進める。

当時の代表的な親清派勢力は「仁祖反正」に功労のあった金自点であったが、身辺に脅威を感じて謀反を画策したことが暴露し、息子や仁祖の後宮・趙貴人とともに死刑となり、親清勢力はすべて除去されてしまった。

金正恩の例にならって要約すると次のようになる。

A　先代王（仁祖）は、継承序列劣位の（次男鳳林大君）を後継者に選んだ。しかし宗主国（清）は、継承序列優位の（昭顕大君）を支持した。

B　（清）の意向によって地位を追われることを恐れた（仁祖）と（鳳林大君）は結局（長男昭顕大君）を殺害した。

D　（鳳林大君）は政権掌握するや、①反対派を粛清（金自点ら親清勢力を一掃）、②（清）に逆らう外交政策（国防強化と北伐軍組織）を採る。

ここまでが、金正恩の場合のように、宗主国の意向が大きな影響力を持っていた世襲経過である。

しかし、このような王位簒奪の歴史は、李朝の歴史が始まった当時から繰返されていた。

李朝前半の王位継承過程の例

第三代太宗（芳遠）の場合

高麗を滅ぼし、一三九二年に李朝を建国した李成桂（太祖）には、建国前の妻から六人、正妃康氏から二人の男子がいた。その中で太祖が開国直後に王世子に冊封したのが正妃から生まれた八男の芳碩である。

それに対して、前妻から生まれた六人の兄弟、取り分け李朝建国の功労者五男の芳遠は一三九八年に私兵を動員して王世子芳碩と七男の芳蕃を殺害してしまう。李朝の王位簒奪の初例となる「第一次王子の乱」である。その際には芳碩を擁した開国功臣の最大派閥、鄭道伝一派も全て殺害された。

その結果、太祖次男の芳果が第二代定宗となるが、実

権は芳遠が掌握しており、「第二次王子の乱」すなわち太祖四男で王位継承に意欲を示した芳幹の起こした反乱に勝利し、二年後に第三代太宗として即位する。

高麗末期は、元に代わって明が一三六八年に建国された直後であった。元を引き継いだ明は当然のごとく、高麗を属国として扱い、遼東地域を明の領地に編入してしまう。これに反発して高麗は、李成桂を鴨緑江下流の咸化島に派遣したが、李成桂は明との戦いを避けて、逆に矛先を高麗の開京に向け「回軍」して、高麗を滅ぼしてしまったのである。

第七代世祖（首陽大君）の場合

一四五二年、第五代文宗が在位二年余、三十八歳で亡くなり、世子の弘暐が十一歳で第六代端宗となった。その時、既に母后もなく垂簾聴政が行える状況でなかったことから、政治は顧命大臣の皇甫仁と金宗端が担当することになった。

その状況に反発したのが、第五代文宗の弟達、すなわち第四代世宗の次男首陽大君や三男安平大君らの王族である。まず首陽大君が幼い王を補弼する名目で政治に介入した。その過程で顧命大臣達は勢力バランスをとる上で、安平大君に近づく。

そして首陽大君は「癸酉靖難」を起こし、安平大君を推戴しようとしたとの嫌疑で、皇甫仁や金宗端などを惨殺し、安平大君らを江華島へ配流した上で自決を命じた。かくして政治の実権を完全に掌握し、端宗を上王にして、自ら第七代世祖に就任する。

しかし四ヶ月後には、端宗廃位に反発した集賢殿の学士出身、成三問、朴彭年ら世宗・文宗に特別な信認を得ていた文官を中心にして、それに武官達も加わり、端宗復位が謀議される。この当時、多くの儒学者たちは首陽大君の王権継承を王権簒奪と認識していた。そのため、かなり大がかりな謀議であったが、結果的には失敗し、十七名が処刑された。

更には、一四五七年にも首陽大君の実弟錦城大君が復位事件を起こすと、彼に死薬を下し、端宗も殺してしまった。

第十一代中宗（晋城大君）の場合

第十代燕山君は李朝の歴史でも類を見ない稀代の暴君とされている。彼の母は成宗の王妃に冊封されたが、嫉妬深く後宮を毒殺しようとした嫌疑などで廃妃された上、死薬を下された。しかし、王世子の母のことでもあり、燕山君には極秘にされていた。

燕山君は王世子時代から陰険なところがあり偏屈で気紛れな性質で学問や学者を嫌い、頑固で独断的な性向があったと言う。父の成宗は世祖時代の功臣（勲旧派）に対抗するため大胆に士林派を登用した最初の王であり、

燕山君を好まなかった。その上、廃妃の子であり、王世子に冊封するのに問題があったが、正妃が嫡子晋城大君を生むのは、その五年後である。

燕山君は即位後、しばらくして、士林派に怨みを持つ柳子光が上疏した事をきっかけに「戊午士禍」によって故人となっていた金宗直を含めて、士林派の多くを「剖棺斬屍刑」や「凌遅処斬」の極刑に処し、ついでに勲臣勢力も除いて朝廷を独裁するようになった。

更に、燕山君は実母が廃妃され死薬を送られた事情を知って、残虐な報復をはじめた。この「甲子士禍」によって、成宗の妃・厳貴人と鄭貴人を斬殺し、弟の安陽君、鳳安君に死薬を送り、祖母の仁粋大妃を撲殺し、三十名以上を残酷な刑に処したという。

このような狂的な様相は、全国に採青採紅使を派遣して美人楽妓を選抜し宮中に呼び入れたり、狩りを楽しむため都城の周りの民家を撤去させたり、民衆の生活にも影響を与え、財政も破綻に向かった。

そのため、燕山君を追放しようとの動きが各地で始まった。その中でも、燕山君が伯母で美人の月山大君夫人を暴行、自殺させた事件で、月山大君夫人の弟朴元宗が、クーデターを計画していた成希顔と共に動いた。

切り札は晋城大君を担ぐことであった。もし晋城大君の存在がなければ、クーデターも起こらなかったかも知れない。

その時、晋城大君は十八歳、即位して十一代中宗となる。燕山君は江華島に流され、二ヵ月後に死亡した。

おわりに

本稿では、李朝の歴史が、現代の韓国ばかりでなく、共産主義国家の北朝鮮にまで脈々と受け継がれてきている状況を述べた。

最後に、類例を強調するために、王位継承事件の総括表を作成して次に示す。

もちろんこのような類例は詳しく探せば、日本にも中国にもヨーロッパにも見いだせるであろう。しかし、それが長期間にわたりいわば規則的に繰返された国家や王朝は朝鮮半島以外にないであろう。

いまや朝鮮半島は歴史的な転換期を迎え、まさに政争に明け暮れている。それは地政学的な宿命かもしれないが、李朝の歴史から学ぶべきことが非常に多いことを意味している。

おそらく本号が出版される頃には、トランプ大統領と金正恩委員長のトップ会談の帰趨も明らかにされているだろう。いま私見を披露しても無意味となることは承知している。しかし歴史の転換期にあたり、やはり書いて見たい。

李氏朝鮮王朝および北朝鮮金王朝の王位継承総括表

先代の王	殺害された継承権者	王位簒奪者	宗主国の意向
初代　太祖	嫡)長男芳蕃(17歳) 嫡)次男芳碩(16歳)	前妻)五男芳遠(太宗)	
四代　世宗	嫡)孫端宗(16歳)	嫡)次男首陽大君(世祖)	
九代　成宗	嫡)長男燕山君	嫡)次男晋城大君(中宗)	
十四代宣宗	庶)長男臨海君 嫡)長男永昌大君(7歳)	庶)次男光海君	明は認めず
十六代仁宗	嫡)長男昭顕大君	嫡)次男鳳林大君(孝宗)	清は認めず
金正日	長男金正男	三男金正恩	中国は認めず

韓国の文在寅大統領は、朝鮮半島問題の運転席に座ったつもりで、北朝鮮に極低姿勢で臨み、肯定的、宥和的な展望を盛んに振りまいている。それに対して、過去の経過をよく知る専門家達は、極めて懐疑的である。

このゲーム、いまのところ金正恩が完全にリードしている。過去二十年間、北朝鮮は常に米国首脳との直接会談を渇望しながら、全く無視されてきたのに、いきなりトランプとの首脳会談を勝ち取ったからである。

金正恩が、既に核弾頭も大陸間ミサイルも持っていると執拗に米国を恫喝してきたのは、冷たい米国に対する「求愛行為」に他ならなかった。北朝鮮にとって米国大統領と対等に会談できる栄誉は、体制保持に極めて重要な成果となるのである。

だからこそ、米国は民主党も共和党も「ご褒美」となる直接会談を拒否し続けてきた。それが、「核兵器を放棄する用意がある」という一言だけで手に入れたのだから、米国の強硬論者たちは「殿、なにとぞ騙されませぬように」と一斉に声を上げた。

その中には、金正恩の「核兵器の試験禁止・先制使用禁止・移送禁止」の提案を「非核化」ではなく「核兵器保有国宣言」と看破した者もいる。うっかりすると北朝鮮が求め続けていた「核保有国」の地位を、トップ会談を経ずして手に入れてしまう状況なのである。

もちろんトランプにとっては、中間選挙が最重要であり、強硬派の新任国務長官ポンペオでさえ、トランプの意見を代弁して「金正恩が核兵器で米国に脅威を与えないようにするのが私の責任だ」と韓国や日本を除外することもあり得るかのように述べている。

「文禄・慶長の役」の後、幕府も李朝も内心では両国間の和平回復を強く望んでいた。しかし「建前」が大きく立ちはだかる。その中で両国間の外交で生業を立てていた対馬藩が窮余の策として「国書偽造」を謀った。

おそらく江戸幕府も李朝も薄々は「偽造」を知ってい

たに違いないが、己酉約条を締結する。

いまや、トランプも金正恩も自らの「成果」を守るため、合意を必要としている。しかし、北朝鮮は最後まで核兵器や核技術を手放さないし、米国も『完全で検証可能かつ不可逆的な核・ミサイル廃棄』は譲れない。この両者の条件が共に満たされる完全合意などあり得ない。

そのためトランプは周辺を強硬派で固めた。いまや格好だけでも『核ミサイル完全廃棄』を北朝鮮に認めさせ、中間選挙に臨まなければならない。強硬派を前に出して、北朝鮮を十二分に脅かしながら、不十分な部分には目をつむって北朝鮮と手を打ちたいのである。そうすれば、強硬派からも異論が出にくい。

だから、この「交渉」は当事者間のみとして、仲裁者から余計な情報がもれないようにしなければならない。

仲裁者とは「その喧嘩、オレが預かる」と言えるほど両側に睨みが効き、時には自らの負担で纏め上げる力が必要だ。うまく行っても行かなくとも、弱い仲裁者は必ず両側からむしられるのが歴史的な教訓である。

現に、北朝鮮はさっそく仲裁者役の韓国を邪魔だと排除し始め、次々と「ちゃぶ台返し」をつづけている。

これには文在寅の熱烈な支持層も唖然とした。韓国の若者の三十二パーセントまで「北が核を放棄する」と期待していたのに、いまやその期待は八パーセントに激減してしまった。

一方のトランプも、北朝鮮の態度急変に対して、文在寅の「仲人口」にだまされたのではないかと焦って、会談を中止する怖れがある。

しかし、双方の究極の目標である「完全な非核化」と「体制の保証」という原則だけを堅持し、過去に何度も騙された「対価を得ながら段階的方式」を主張する北朝鮮にも、実務面で配慮した「密約」をして、前に進める可能性もあると期待している。

（二〇一八・五・二四擱筆）

本稿を書き終えたのは、恒例の「まんじ合評会」の行われる五月二十六日の前々日である。

ところが、その翌日早朝、早くもトランプ大統領がシンガポールにおける米朝首脳会談を中止したとのニュースが飛び込んできた。本来なら、ここで書き直さなければなるまいが、まだ首脳会談再開への動きもあり、執筆日付を明記して、そのまま提出することにした。

註記　本稿執筆に当たり、李朝の歴史については、主として朴永圭著（尹淑姫・神田聡訳）『朝鮮王朝実録』新潮社（一九九七）を参考にした。